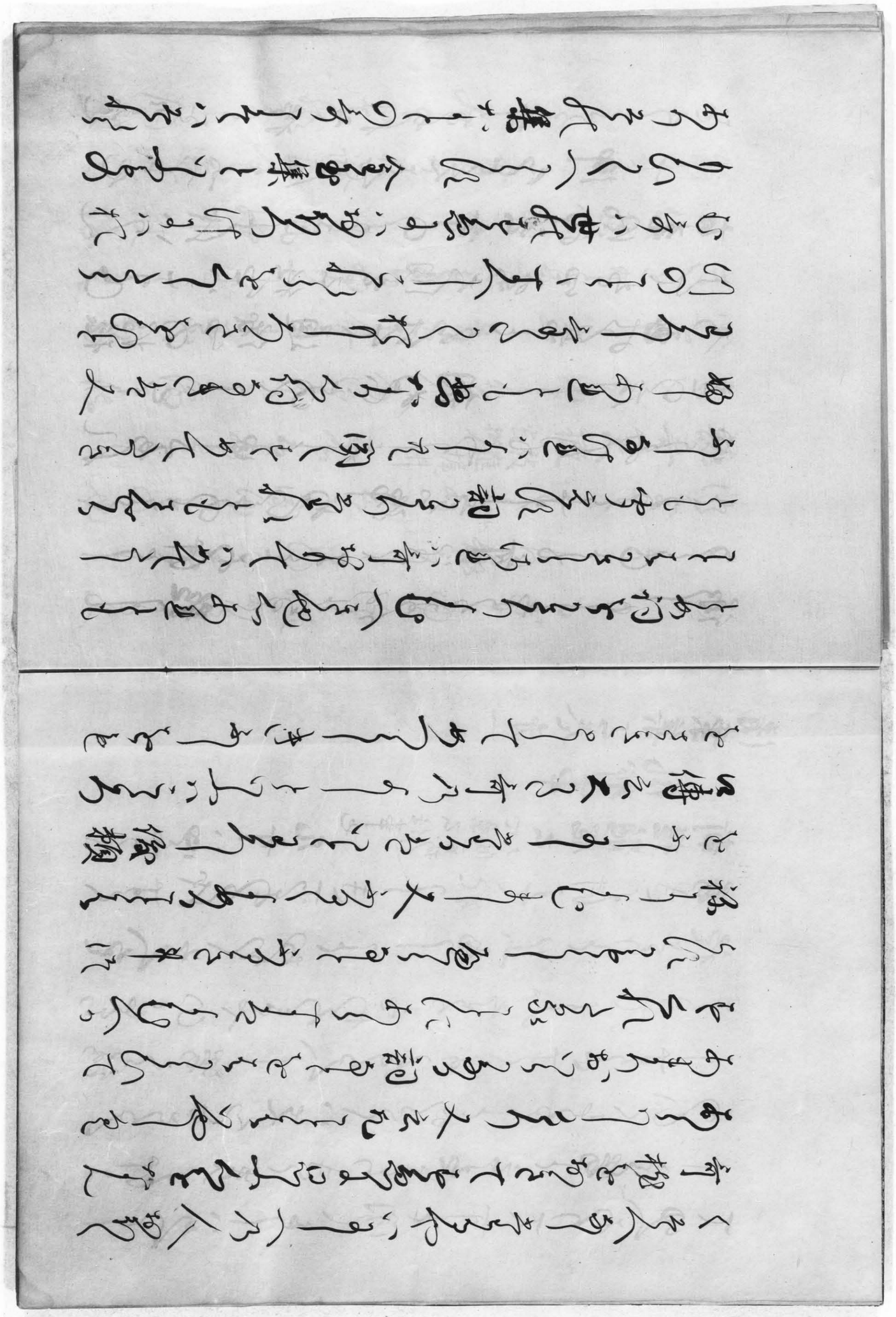
543
6
SEKISUI JUSHI
150 cm

京都帝國大學圖書館
昭 24. 7. 13
184138
543
セ
6

清葉集上卷第一

風雅事

新撰髓脳云（已象云任事也 大例言物）凡哥ハ心ふかく
深きなりけれとも　きこえあらはすく
はしくとよみなすへし　ことわりをつくし
きわりてよみなすもの　ひとつもの
うすくすなをなるもの　一深こと
あいくもるもの　かくれいなくとをる
一こと　こと　こと　こと　こと　こと　こと
てゆゑありて　奇　こと　風　こと　ハ　ふ　こと



とくとくに奇なあれそれ物語を作
して御ふみとえらせたまふつゐも
古来風体に奇の心さてはいふ
ことにて古来に伝はることは
乃至代集とあれて通俗の格格
きの序にはいふ詞ぬいとのてて
心ゆみちもふつうなる中にあれ
とるるすすきに錦ぬのてて
るるもに奇にてあけて
歌のうるはしくるるに歌も

あるもきこゆるなる
しとしに歌奇といふ
ほめてくもあるも同ゆるもの也
歌奇大撰 後進 掘井宣拙 云ふにあるし
きとそれとも人のまに海
心とりしめて光とを蓋いふる
きとのりめてそちのへてて
三代集とむるふ代可教
絵之達に秀奇不論古今遠近に
ふしきとみたる

爲一又云つゝにたゝかれ京を親
爲てこゝ給よりそもゝ一こゝ
みゝゝゝゝきハ古と　伊勢物語後
撰拾遺三十六人の集の中よりそゝ
ゝ年の奇をゝよりゝゝ一人の書
忠峯　伊勢小町かうたゝのゝり和
ゝ此ゝをよゝ此ゝゝゝゝ
乱世ゝ乃盛衰ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ白氏文集の第一二乃快
常よりゝゝてゝゝゝゝゝ

和奇のゝよ通ゝゝ色和ゝゝ八師ゝ
ゝゝゝゝゝゝ奇ゝゝて師ゝゝゝゝ
古風とゝゝてゝゝゝゝ
ゝゝゝの人ゝ詠をゝゝゝや
新撰髓脳云
いゝゝのゝゝ奇
世とゝゝたゝゝゝ勢ゝ市潘の母此の殿
天の原ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝ初恒中此のゝゝゝゝゝ
ゝゝ人の流なゝゝ人乃

貫之奇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すまのうんあるうきたとゝいを中将
の月やあはれをもよほす　紀貫之の詠
なるこゝろをいのをさそうな
ほへし
京極殿を　右兵衛督　源会　賞翫もし　頼朝卿
将軍　物云　近世の
人もをもく思ひ　風情を三十
一字にいひ　うんこゝとをとゝ
てさらに　詠のゆゑ　むきをしる
こゝろよりて　世の人のたゝ
思ふの花のけをとり　商人の　辞　夜

をめくらすこゝ　紀も　大納言　経信
の後頼　卿　右京大夫　孫　俊清　摘卿
ちくもを　三文　則　道　をもの　伝
ゆる　基俊　卿　うゝ　人こゝ
十三氏　世の　ゆゝ　き　海　とゝ　て　常
ゝ　ふゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
き　世　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

大納言経信

夕されは門田の稲を吹とてあしまをやなみ秋風

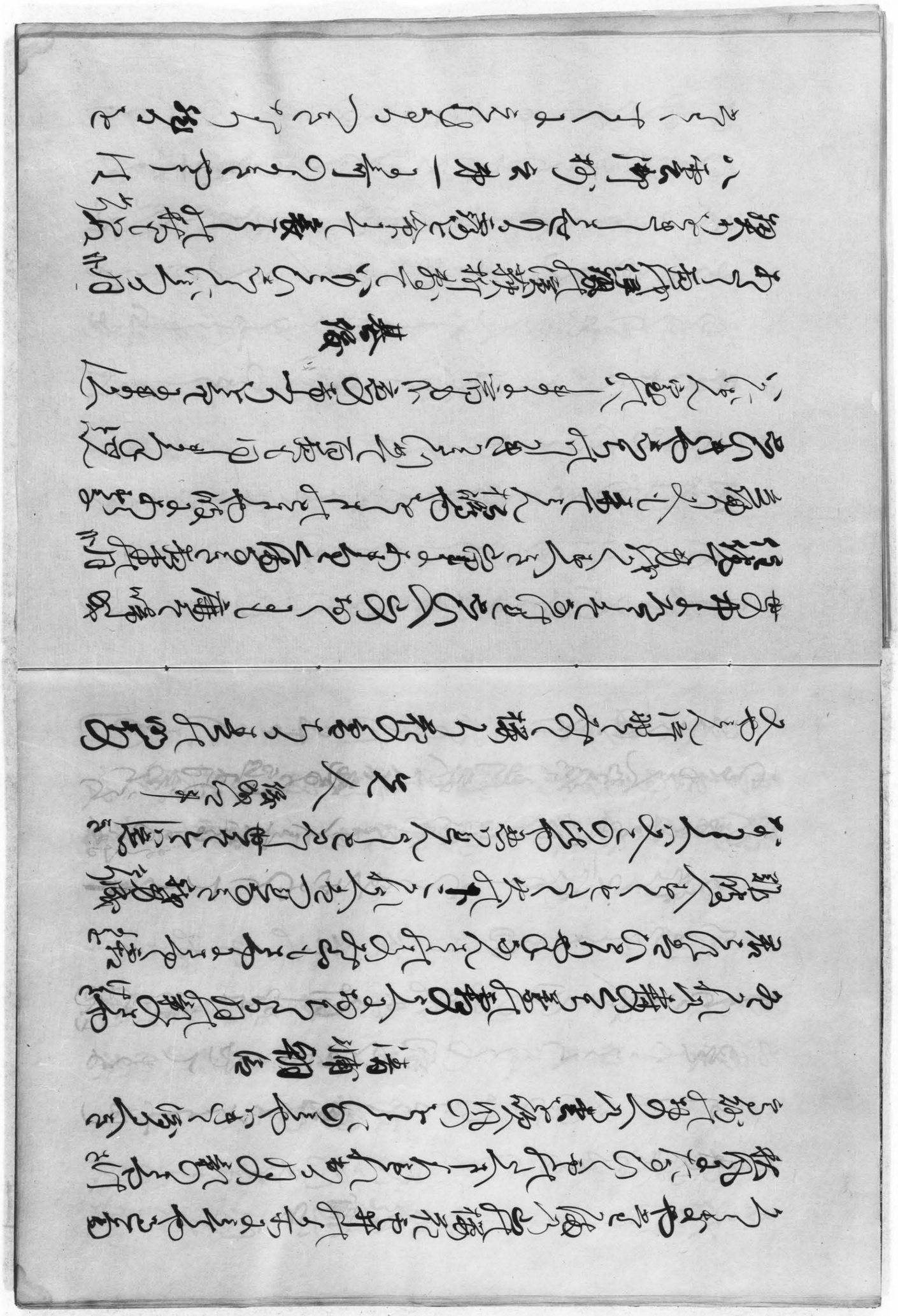
君が代をいはひそめてや神風やみりそめにけんうきなみ
花を風吹よりとしを経て松のさかえをあふぎ白波

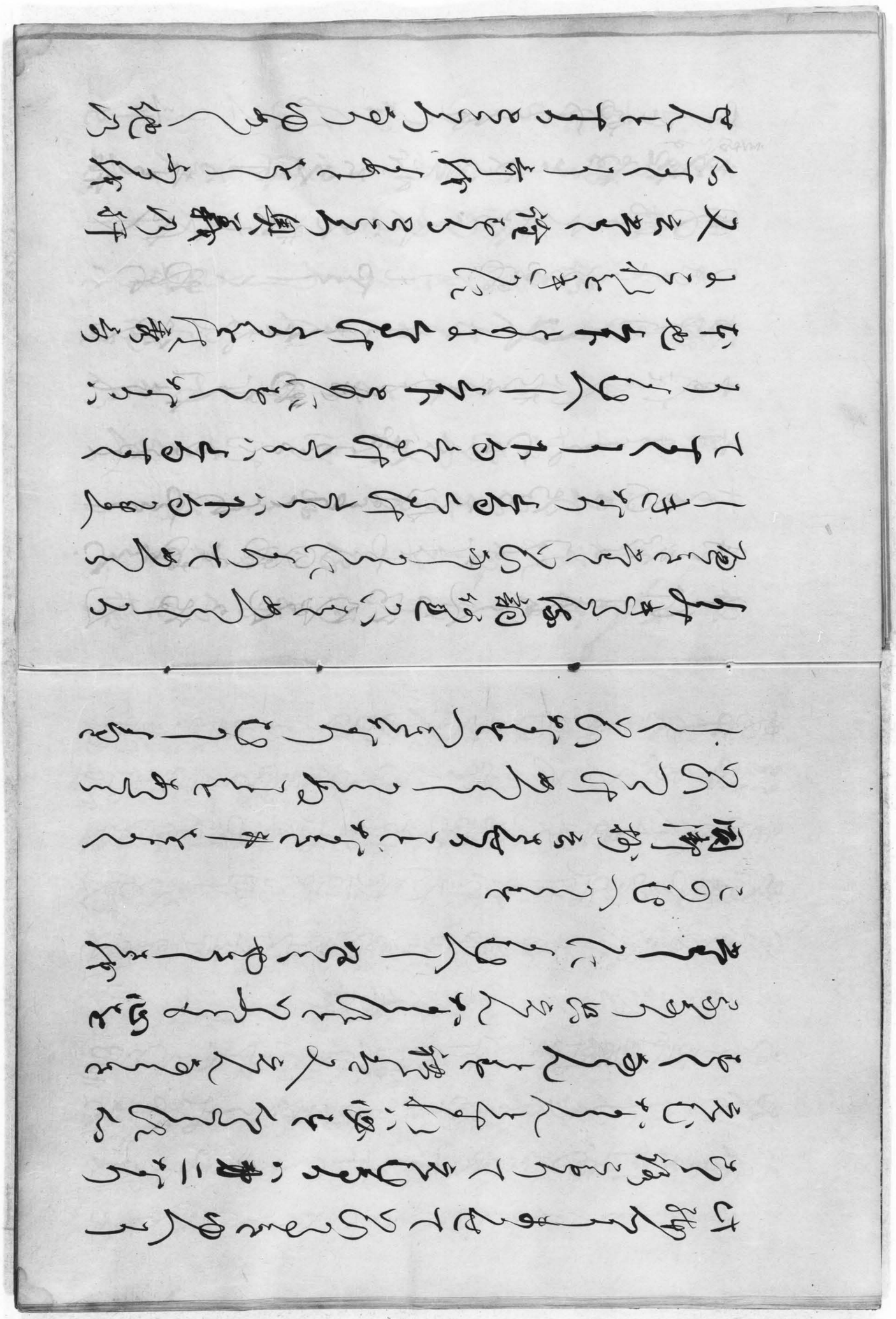
俊頼朝臣

霞吹ゆふ山のをゆるの白糸
花ちるかやそらに見ゆ岩ぬ波は無数
こがれそめしの奇秀哉和歌
あるさしやや
鶯のあの人を風にはなをしるる秋の文言
古今を愛で詠ぶ深き行のこころ賢き吹
見へ八雲をしりわかりけるすらにも

さそふ風かな
あるもうん野辺の門萩にて色の濃よ月宮うら
ちの菊をすまして行白露のうちにはまる数
うらをかりしろ見ありてうち年
乃ちこの
うちうちの山風よりかけて八行ぬ物と
見いうちうちの詞ふよまうせてもる
ふもしのつはうけうう寒よりとしは
きをうう

張籍





やうを如つてこれ
京極殿を夜詣ぜ給ふ所に之奇ハさて和
国のゆゑにて行ふ人へいと哲もくれく
きとゝるゆゑもやうく物あハ
出てうしなへきものとそみて行る
事にいたれるうきものなれも
奇ゝゝみつゝゝ偽ゝゝゝゝゝ
ゝゝのそ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
き彩よ月よなゝゝゝゝゝゝゝゝ
しけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

扨も此十地のうちつゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
すきゝゝて見えゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一端ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ欲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て堅固あらぬすまことにつくれば
をんなすがたもうつくしみをうき
ことまて作り出さるいかゆゑ歳大年
まて作りなをし雅的あり人
歳まつて
私云心をなをしつくし給へ自
分をみなり近日の人心情のう
つくしく異まてこそいつた
ふをんあつて行へかり文給ふす
ゆり風を美味の感ゆ法華て
も又世間感衰なつたつてもも
ひのうをんあつてハ中ゆう故戸部
中ゆ行ハ異をう樹ちはあれト
風の奇風情行りろくそたれ
ともを見をハんあつをとは中ゆ
遍照僧正出家の時発のとれのう人
ゆうをハうれうそしもをあ
我ゆうをハうてやあうん光
ゆそう後あうをかをとはれ
きこれするうち家出庵訓ゆと

さしてにやさしくもありつゝ侍るまて

勝てん路也

六百番歌合　経家

左 持　季経卿

春といへはをとはの山をまつそしる桜まちえてこゝろあるらし

右　中宮権大夫

春ならぬ人ここちには霞たに花の色とてさそひける哉

右方申云、左歌初五文字の心ふかう

あはれなる姿也、左陳云、初五文字

字の題字もなし、不可勝負、右

方申云、旅路の友前歌姿は優なり

しかれども侍れ大かた近来の歌

よみ様にする詞をとりなしたる

さるは偏曲折徹妙の風情を尽

したる旅路也、左右不散

其心事なりや、此大歌詞のきこえぬ

てとこる詞のまするとか見えてや

侍らんと見て侍る十首のなかに

も侍りしや、勝負不分明也

廣田社歌合云　述懐

左　　　　　　　　　實家

昔よりめくみを廣田の神なれはさりける秋のみこそあらん

右　　　　　　　　　登蓮

いまてと秋毎のかけをまちてみれはくもゐにすめる月

左哥めくみひろ田のみやといへる心を

あまたみえ侍るに秋の心とまた

られて侍るにとりくはへて侍るを

猶宜將愁字作秋心とよめる詩の心

なるへし　右哥詞あり花とよろしく

又よしとかきたれともことは清

きこしすくなまめかしくてよろし

ゆくそみて侍るに識く深く若に

詞気詞みえし偏讃老を称ふ

とりてこそひとつのまさるに侍るに

左はさるしも秋のよふかくこそ侍れ

あはれにきこえ　右まさるはすくれ

月同感絶とよみ深叶風情哥

又判者も

西行御裳濯哥合

左　持

をしみても花の盛の色にあらしの暮にしのふ浦の月かな

判云 左哥ともにしくけたかく

みゆれともまくらふれハ勝とや

申侍らん

同前合

左 勝

花よりも嵐いそちるらんにてきえてしつ（撫子と）

判云 左哥いとおもしろく絶たる哥

こともなくよろしく勝とや申侍らん哉

同頭合

左 勝

よし野山やよいくとし思ふ身と花ぬなきと人や待なん

判云 左哥ことなくよろしく勝とや

申侍らん

同前合

左

霜さゆる庵の月のまちやすく見て月ハこゝろやまかせ人にハ

右

しつよひとりはかなふるる夜をたえぬ人をとりてみるらんかへハ

右哥いさゝしく艶なりハきこゆるとた

前にも或すゝる調なるへし掃とやへし
私云まへりくり三十六番前合り
こゝの歌てよろしといふこと
所よりそれ給の判者あり忘れてそれ
給へし

順徳院御百首

はるもも花をいくたもあさ物と志弁ても借り嵐哉
やよりやまとくにめしあいくさ
またけにいてもこ代集ととゝのす
るにく物給にもしりくるし

始め峯の後への山へし
けしあまりはかれぬはもかれしけれは夜の末なる盡
又句は新進風情始めなり哉女
歌を今悦同に
ことして上音もあるまね事二村山風峯のまを
又句廿一字悉秀逸如瓊玉光明
照耀対様に
今まね岩本もさしてきはみなのうさ此秋の冬霜
此廿一字文無字歌体感涙に云
之云寂云々

中務卿親王 文亀三百首より

吉野山花咲ぬらしあふさか関のこなたまて白き雲風

毎日春霞ふかうしてあらまほし

きく殊勝に

もいふ文風ゆるけれの素なみ山さやかにある月影

さるへきかなやもしやらにいつく

くしそまて く存し候

当流擬古物度擬し自詠と擬又

られしは定て擬古詠奇なる

御風雅草稿のまへに書也く

千載集よりは撰者前勅を十一首也

勅定ありてその首をかく卅六

首也十一首を殊にすくれたるへき

故なり候へ

皇太后宮大夫俊成

みよし野の花の盛をけふみれは越の白根に春風そ吹

夕されは野辺の秋風身にしみて鶉鳴なり深草のさと

月さゆる氷の上にあられふり心くたくる玉川の里

御つくふ夜のこゝやかちぬ捜きてをなりぬ涙の音かな

哀なる物しきの濡れ衣小露更袖に渡しけり

おもひきやともに見し月はかゝりけるとてめて百敷も同しうへもせんとハ
よみの人のうへをかなしみ侍りて成人となりて猶くさ
あひ井ハあはれなる人ていふ人ハ世をすてゝ後そむき
後徳大寺左大臣のもとへ山里にあそひ給ひて夜半の月に
雲ゐの人のおもひそ更よふくる程を經ぬ花ハ三千年もにほひもを
いはまほしくめつらしきも緑に松はさらにとも哀なれ
新古今 哀傷哥ハ自家撰者 再為
数寄道被入之 同勅撰の新勅
撰奇撰也

権中納言定家

みもなきものゝ哀を知しめ給ふ桜花の咲ちるの色
冬の風もまたよハかしあはれハ草木の色もよハく世成らん
三成集にハいろいろ色まかし秋にして月の光成けれ
此文秋の末も色めくへしとして月の中きのこりけ
此道の紳にわたる秋の日にさしそみ侍るにハそむきめ
秋とやして夜にはなかれ行の音をきく人のなきをきは
松をとひて人の暁のあはれをかなしみ紳のたくひ
まつもまた此ころそ年へあるあるいはあるあへつれなよ
こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ
藻をくりはまはらさて火をたれしむかしより心の浦もおもひ絵をハ 禄八

あるかぎりの衣装をまとひ色よみをれたる枝
ぶりもこの衣ぶりをまねびとるよりは
恋人をやさしぬ黄昏に枝をへて同じかつらの月新
たなる月にみいりぬ二つ三つ四つ五つ六つ
とをさなきものどももいくばくかの月
日をへたるかの家

續後撰　前左衛門督家

明治廿年四月廿日　於　宮内省
あるかぎりの歌人　つゝき　櫻井
て門をたゝきぬ　ゆるしをこなひ　みの月毎の
立田ぶりにて　歌　ゆきて　ぬ　きれ　ぬ　合

そあもあへとも　時　毎　ゆ　ま　よ　年　四　ぶ　ま　と　わ　て　秋　貧　吹
いと　門　神代　の　ま　ひ　て　今　し　ま　ら　ぬ　秋　の　春　月
ら　め　の　上　ま　ま　の　枝　村　ぶ　ら　ま　ら　ま　ま　神　代　ま　ら　ま　ん
ま　ら　ま　ゆ　の　ら　ま　ま　ま　ま　我　ま　ま　ま　と　神　や　け　ん
あ　ま　て　ま　ま　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
頼　ま　る　品　の　紙　ま　ら　い　く　の　人　ま　ゆ　ま　て　ま　ま　ま　ま
み　ち　の　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

續拾遺　前左衛門督氏

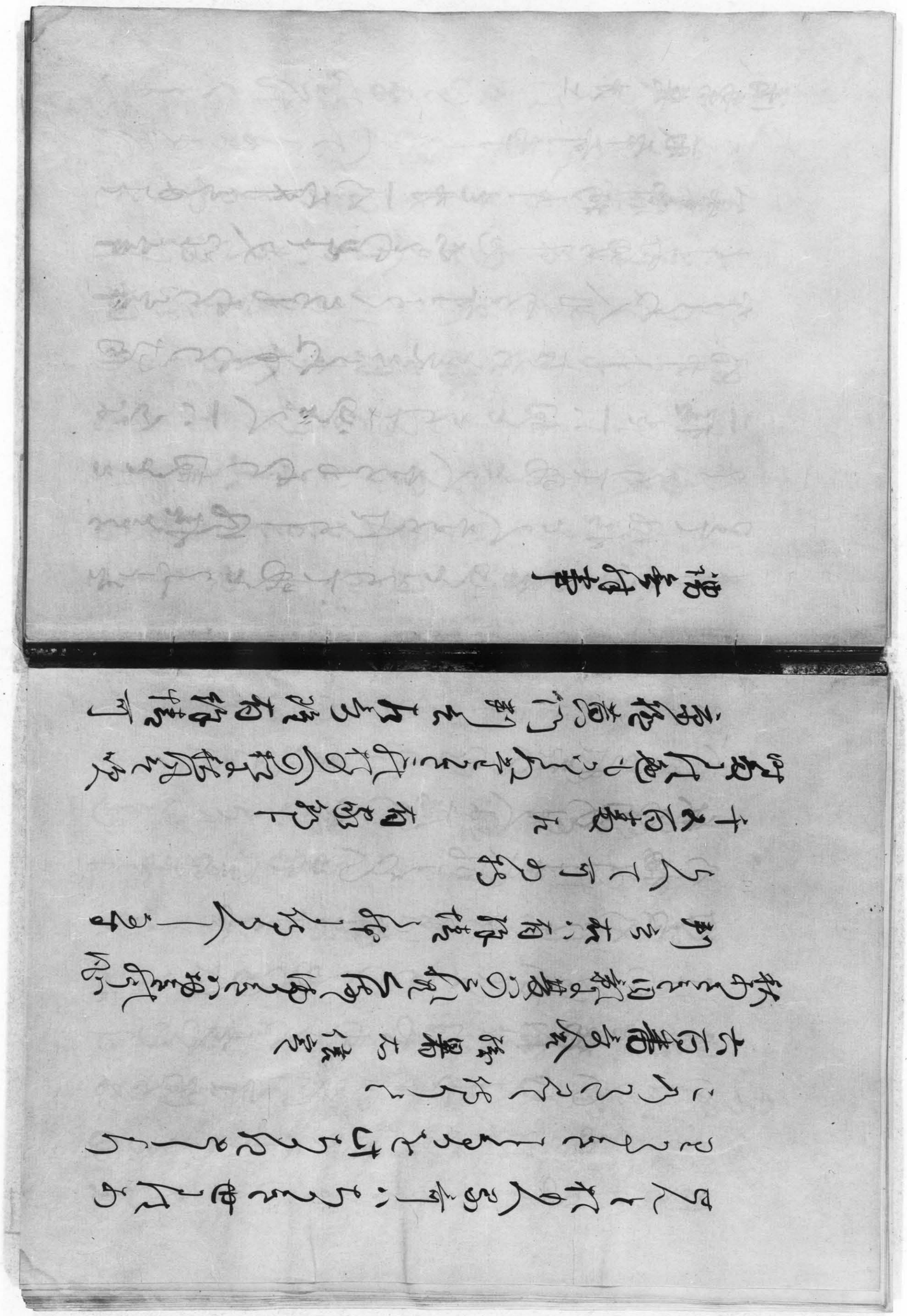
ぶ　る　る　ま　て　ま　て　て　み　ま　て　ま　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ら　ま　ま　い　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

今こむといひしはかりに長月の有明の月をまちいてつるかな
此うたはよひよりまちけるは名残の深きもきこゆる也
吉野川ときゝ入て行をとゝめつきせぬ人の心のみなりけり
かくの家八十餘なりて源なる人まいはほよあまた歌あり
此歌詞標　一片義簡萬端
四条大納言云　此謌　和哥九品
こゝ謌とて　しかるへきものにて　あまりれてこゝろよき
あるなり
ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞ思ふ
これをいはゝ新古今やはこれもいまはあるにて此歌はみゆる

きえなのちまゝ咲しをもをとはゝのくにみなしておもはね許
たゝるゝの衣のうへに秋風よそふ夜さへもとりなきて候
許や三寸月なくうもひとつて見しれもあり秋の川かも
心の浦や宮のとなけて立波と月に吹ぬる秋のしら風
露霜の地くそれゝまく色にてぬ座をき秋の山風
おほかたは秋の名残の心にも我となくこそなほうつるの風
こゝ夜の風の風にふき捨てあらそやうにつもる白雪
絶情
忠峯　十首　絶情歌
我宿の花見かてらにくる人は散なん後そ恋しかるへき

よ中ころ淋しくあまりに人の色
深山にはあられふるらし外山なるまさきのかつら色付にけり
あふ坂の関のしみつに影見えて今やひくらん望月の駒
是は哥合奥書云又案物ほうさと
しきふしをいふの頃といひきこし
こそあれとも来り候すといひてた
まみあけそうりしうちなるあるる
もちとて艶うしも哀も聞ゆ
哥もの有るへしとこそ亦に成
ぬ是は其の詞とこその知り京にの

らひふかやうなることのあるやと
へとまれ花のあさりに霞わかれいさ
秋乃月のまへに簾乃あけをさゝかきりを
乃梅ノ香れ風にさそひ嵐の絶る
時雨乃うちそゝきなとするやうなる
ことのうちひてそあつかひて中程
りきこ待れと月やあらぬ春やむかし
のといひ此年のうちに春は濁るな
といふ梅か何となくめてそそとまゆ
涼まりかやうなる詞によみよ



清輝集　第二

取帝奇事

八雲御抄云是第一の名哥とて
しみのゆゑ也　ちなみに又いとゝ
なつかしく人もふる事ともあるゝ事
の中にも古今とをとゝあるは肩
二種を一は初とゝうて心をゝ一は人な
ゝうて物とゝ人をもあり詞とと
まて風情とゝ人をもとゝけり風情をゝ
ゝ　はむゝ長心とゝうて物とゝふるを

命人は古今奇よりは月をゝ一夜をゝと
人をゝはゝ命やゝゝて百首ゝ我者
の梅咲をゝとつけやゝいこそふるゝゝ
ちゝぬもゝゝいつとをゝ見いんも
初も人をゝて梅を月を人をゝ
なりゝはゝとのこゝをゝ初
とゝうてこゝろとゝ人をゝいまゝ物
万葉集のゝもゝとゝ
をゝゝてゝをゝとゝ人てゝもゝ
ゝ人をゝは文の事はけくまい

のし秋としてろさいりなをしにいふ事
とうふてつしく夜ゆてさけくともにと
もありあしのきの山桔梗の色にいて
秋さなんをやまんなわしといふと山
よちなるれ色よあつるにとわりめり
さちやきいし似すとくるれとくし
とりてしにらをとそろ紙るのさちや
きいし海るとといとわりすきれあまの
さちやきてめのふち衣ましとにあれ
もいまくききるわて色とさちやく

あま乃ふち衣といふなる事とをとる
やうとしもなくとわり又さろくまこ
伊山の井のといふを人もかむすふ
手のしまとせくとおや之れいそう
きさすあつるもあつれといふ事を
とわりさすのとなくすみを山と
つきねてす紀のよをすくのなる
せ川ありてゆくをつに出ていをね
なしいろ百萬葉のふつさ詞ととれ
つとおすよ衣るしにすてあわしとく

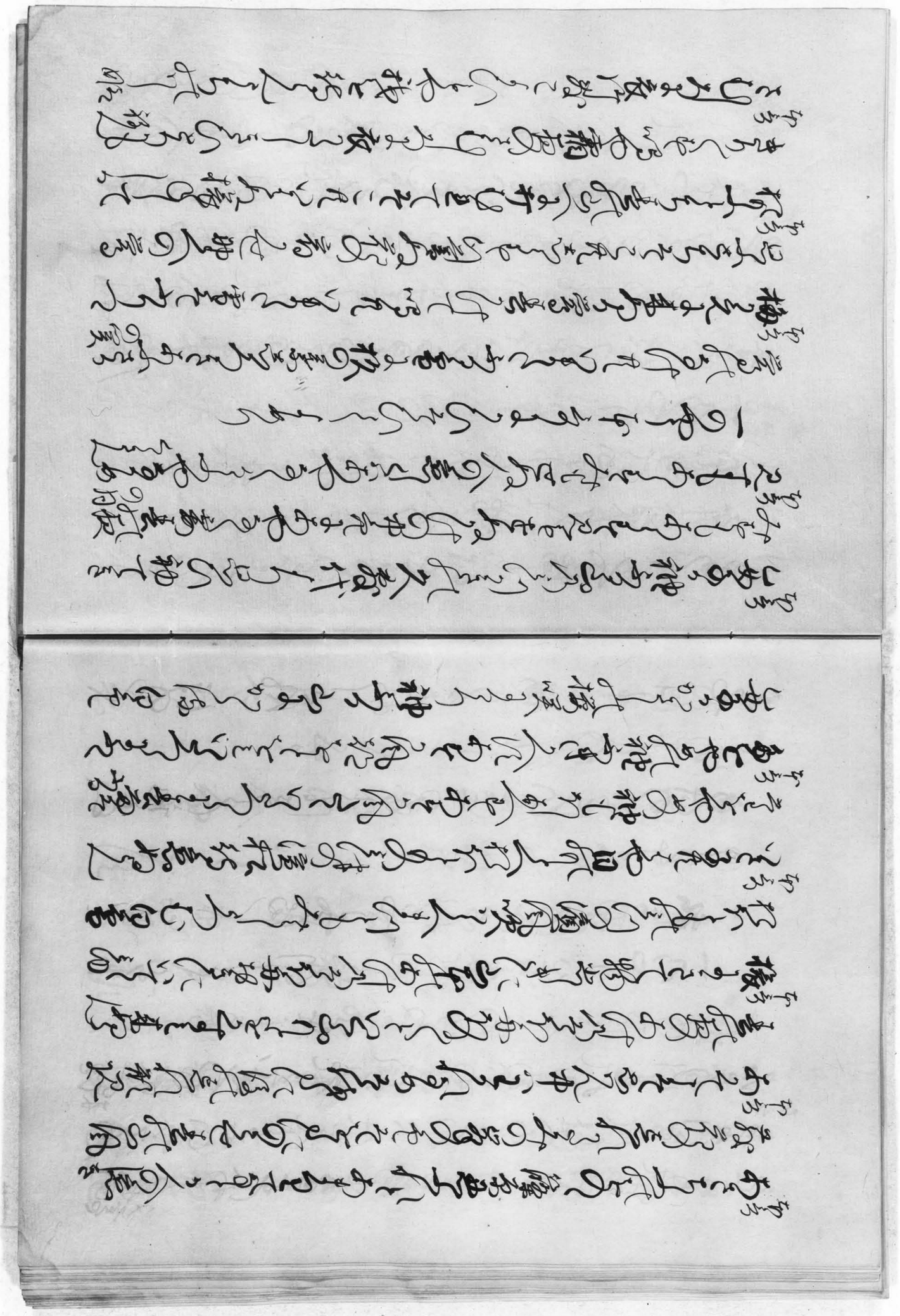
[illegible]と後撰奇よりはるかにあ
はれそうといはるるなりとす
られたるもの〳〵中にもこの
うたまれすぐれたるを代々の人わかり
その中よりわとやうく見てこと
てをとうたはるんして我んも
初もすさをく什道の魔也なこと
のもしへすを代俊頼奇なしハ
やう〳〵うたまれまりそれ
もかちうたをれまりそう奇
をうたひまハなを代ものうたをとろ
るなり也

俊常法師 俊成卿女 とちあ 齊衡 之年 荒サて
東三条左大臣の殿のゆりてうたむ老の
うたやうとへるを形恒の老ゆうたれ
この歌ありてものうたを世代
なり 輝ゆうりせい雪きあとあ
はるかりいつるをうたるる
うたかりを稚とこれハ奇をとろさ
うたうたあるとうたりあ

りうとへふるゝ所なきさ奇れてこにまゝ
なる人乃歌論は一の事なれと我
とかつてうよみうんよハ彩れ
うへ人名やとへくゝ赤代の人とつ奇
乃初もようたてうこのこあるゝ
くゝきれハありてうけをうとよ
まくくとまうかいうつけ人まうハ
ゝとうゝふもるきれとうの人のうち
先あんとて彩うゝき百葉集
の初ふうゝなるてまへとも

らハるるすゝくゝもりとはもるる
ゝとうゝ市ちあるんとするあり
二白まいゝてんこるもうまとむ
うへうゝす九古奇れ初いゝうとも
之達那もるれし
彼を掘井宗祇と古奇とれてあゝ
らきうを孫ゝとゝ内の井まこる
うをよてすうるをかゝけ
なし二白のうへまこ字白字これと
のうを彩先と葉てゝ同れとゝて

[illegible]

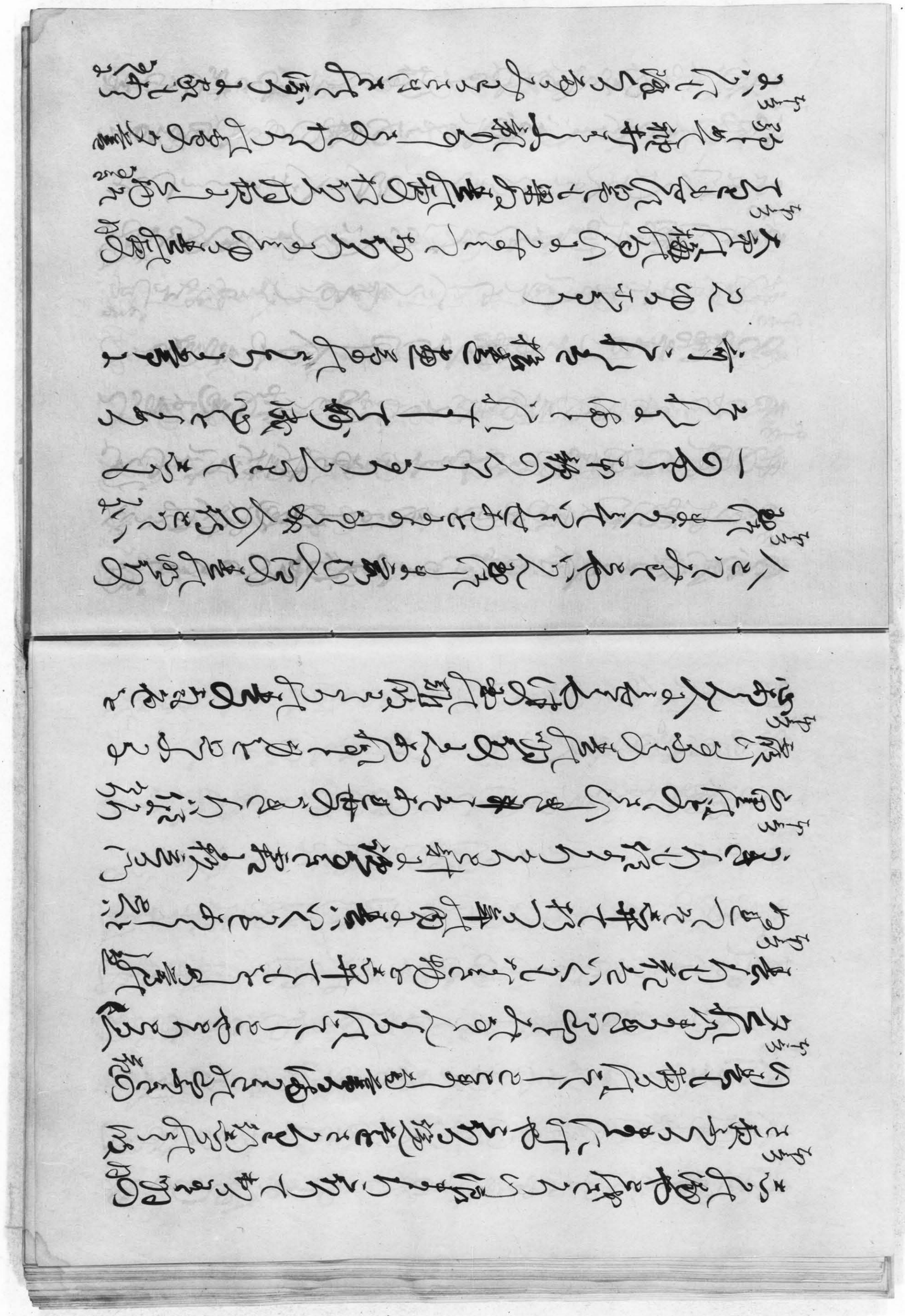


萩の花まねをしてたちまちに
たちまちに秋をきいろくして咲う都人をうつす
さてはやはるあらたいてもんひとつに言の秋の久竜
見のあるへひとつに言の秋もちろんのきゆすい神とつも
ゆるまに里の月新さのいまもすまこうまに神人の秋風
年をへて住こう里秋いてゆるいて海岸神とへ

一乃やう

中方の心ちもちろん月桂と建立さろう
竹 中方に賜参こうそろう沼のるるふ
ろうへ人ゆもしばもろこのそとろのろう

消ろうに又やこ心とろいひんろる橋地しわう名ろ
ゆるゆるの秋の名ろに消ろうに秋の神人のろるろころう
ろう海や月の光のろいろへて時の花ろも秋のみろう
ろう名ろ色ろう花ろろう海の浪花ろて秋ろ行ろう
印新ゆろうさろう色ろいろて明行月の新やろう
ろう基ろのいまろ青ろろうゆるろと市ろのろるろ月やろる
て川ろとろ深ろうろ印ろうろ浦のみのろり西ろ
ろう天川ろとろろろうろあろた男ろ西ていい年ろてれて
久方ろ中ろ川のろうひ西いろに想ろうてやろと行境
ろう久方ろ中ろろひろ宮方ろ行ろとのろそたのひろるぬ



高砂の尾上の志らねなれは日もはかりそてぬれる松の白雪

秋風のうち吹よせる高砂の尾上の鹿の声のうちは月そまつ

みなせ川いかにせん夜もまた志られ思ひ人をとふらへしつめ

なこり川瀬の里はあらはれはいかにせん人とあひつゝ聞らん

秋の夜はさてもわれてあへこゝそすまし世を無我とつま

かり河清水寄を志とを無清之河同し人しや志らん

高きせうらいさの萩の露もうつゝ袖の色よ志て

秋の風ふかる庭のよわれてさ朝秋萩をれとあはれ

白妙の袖の別の露ちりて身をしる色は秋風そ吹

白妙の袖をもかへさ日ゆちりて心まむせひちきりける

しのひかね十五夜の月はかへ風吹しよそに見え

秋の夜のあらしのそらの月はいつの心にてあらん

秋さいはまつ名の岩松なりの末の彼をもあはれ

山さとの名月の月のあさち原はるかにもあはれと

暮ねさし思ひしみの山そかし手れものと月の色

三輪の山いかに待らんとしふらし暮るへもあはれ

白妙の衣よ秋いく夕ぬ草をなみの夕暮の色

一のやしなか斎の岳一ふしそこわすらる

ぬる日影自くらしの桜花つまて消ぬ雪りそてこそ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

私よ　亜麿　絵図　[illegible]

[illegible]

[illegible]

世人を惑[illegible]

桜[illegible]

[illegible]

一[illegible]

鴨長明抄云　御所の内会よ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中務宮親王御所寄云

[illegible]

[illegible]

私云此御所寄[illegible]

[illegible]可謂不[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六百番歌合　　家隆卿

右

[illegible]

判云

右所ハ素性法師の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一番 薬師寺 慶賀

千首百番歌合

左 梅

[illegible]

右

[illegible]

左ハ百番歌ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

みゆん風情いとゝ〳〵たう
けうつきをあまたゝきていの方さん
ありわらあきちゝ山のやゝけくとよ
や行〳〵ん表もゝ〳〵へやとわれく行
ゆとなれあれあはけもひゝの
雨露乃行〳〵まゝうゝ行〳〵へてれ
ほし行〳〵ハ陽芳すてゝまゝゝいて同
科ゝやゝ〳〵く行〳〵ん
羽日新旬（万葉）へつゝゝよてゝ月ハあゝゝゝいりとゝゝゝゝて
同奇会

た　雪絵会

弱ゝあてゝゝゝの雪世とおゝのけハあゝゝきゝゝあゝよきてゝゝ弱

右　俊成会女

ゝゝ新ハゝみゝゝゝしゝゝゝまてゝゝ新ハ行て殺ゝゝ
たゝゝゝ乃雪世をゝゝゝゝ万葉集ゝ
ゝゝ行ゝて也ゝゝ行ゝゝゝて何
乃雪ゝゝゝ行ゝん箱乃ゝゝゝみ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ行れ万葉集ゝ
もゝゝゝの山野ゝゝゝハゝゝ〳〵ゝゝゝゝ
いゝゝやゝゝれゝゝ行ゝ　右ゝゝゝ

ふることハ行ともすると初とうるさ
行ものや大ことハ万葉集ものこり
きやうなる事をとゝ綴りとて
ふるふるものもとゝ行れ伝聞れたる歌
しるものてこひ初つるをきよハあら
ゝゝやすゝゝゆるしつゝて大傷て
やはらへうん

六百番歌合

大傷

そゝれゝ初て道の歌の義命て何上物も思り

寄家恋

判云大命ゝもしゝやゝ万葉集をとり
行あれゝと詞不て庶幾ゝ

愚管抄云 俊兼注脚 万葉集奇ゝゝ事

寶治百首よ

正三位知家

色きつゝ雲ゝ居ゝ鳴ゝ雲ゝ居ゝ鳴ゝ雲ゝ居ゝ鳴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なるべくは海を見ずして海を見ずして海を見ずして海を見ずして
こゝの人をまつの海人なるにやゝもすれば
漢詩の松帆の浦の朝なぎに藻苅ぶね
すゝ藻焼く海人の藻苅ぶね
石清水 源時賢 禁中
新勅撰 霞りをゝ夜よすがらの月の光
判行の天宮人のかとも
海色門細 伝二位家隆
海風も霞ぬる色の春の夜
細殿の女房女房 長方
細殿の女房女房 長方

色にて和歌とゝれるゝ詞 賢法師
乃奇人のこれとゝもゝ人のこゝ風抑
へて色ゝ乃へ 法眼抑
古木風帥云 百業集の奇ハ
えてゝ乃て言ゝ
き人ゝ
一物語奇取和歌
後鳥羽院御抑云 歌合の方ゝ
抑ゝ
運なゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恨事也

百首歌合

右　左

俊成女

新きうき花のところを月もえうんにあらぬ
左　花の色の月えうんす
又　はるの月に女人の寄をあ
うしてとも艶　まんて作りとき
はまん〳〵

俗印歌

うの花も関もえうんあるうつるに人をのこ
西行百首　左　左

俗印ろ

月のうちにあるとこうしてみてきこえて
月のうちにあるとこうしてみてきこえて

清案集　第三

代々宗匠不廢事ゝ記録ともあるべしいま俳諸ゝ
理乃たるにもかゝる詞乃あるべき
ゝはあるべしいま俗のきゝなしむしまり
てゝめゝるゝを始めとして今の後学
未生ゝんせいの初とゝなりて書ものゝ
作れしもけやゝるのいれとゝきは
へゝと俳乃制戒ゝも通屋ゝとあるべし
法書の律ゝも恒言ゝとゝてゝゝ乃
法とゝゝきゝんゝもゝいてゝあやもゝゝ
ゝんゝてゝ達乃いまゝれゝ
盥觴ゝのゝち代々の風雅乃めゝ
ゝ乃ゝ色ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一ゝゝ

中務乃歌ゝ文意ゝ百首御ゝ

村雨ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

民乃ゝ通ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

六百番歌合　恋部　有家卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右大臣家歌合 夜恋 結月

[illegible]

六百番 家隆卿 [illegible]

[illegible]

判云 [illegible]

[illegible]

こゆるん

同歌合 春曙 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

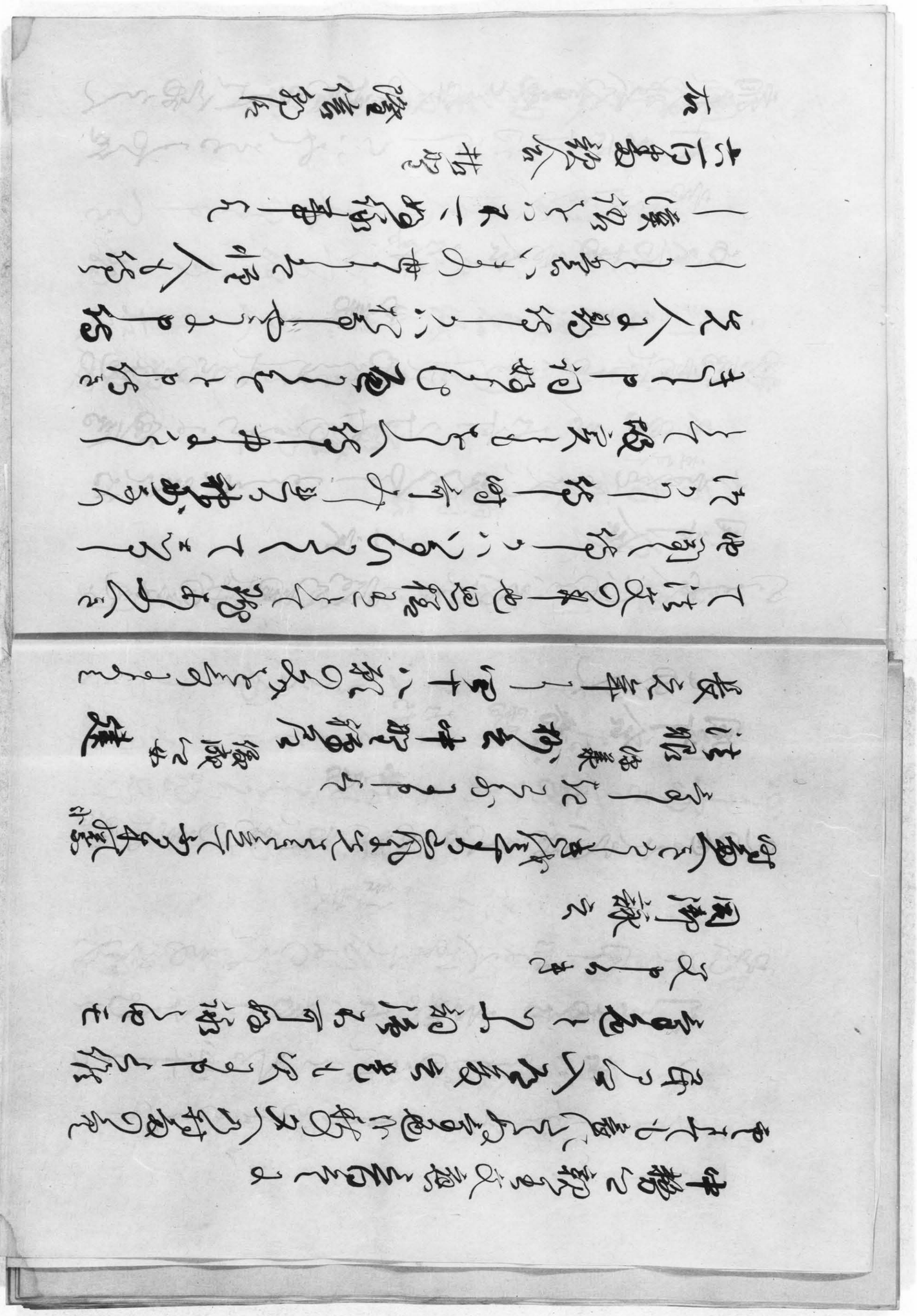
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

判　六右衛門

[illegible]　五百疋　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

同　[illegible]

[illegible]

京極[illegible]判　六右衛門

[illegible]

六百疋　[illegible]　賭射　右

[illegible]　[illegible]

判　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
八雲御抄云　宮家　[illegible]　あとき
吹あ[illegible]　あ[illegible]吹[illegible]
[illegible]　和の[illegible]
[illegible]
私云　家持
[illegible]

和[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

忘不可詠とゝゆ和哥ありて
ゝゝゝゝかゝりとゝ　山家雲
可詠情也
千載百番会　九月
あまつ雲ゝ花と雪とゝ見るゝ世ゝ人ゝゝゝゝ曙
たゝ月ゝゝゝゝ

又要初うみくん

一まに　　春野

六百番歌合　ん

[illegible]

判　左　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同歌合　ん　　那賀

[illegible]

判　左　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同　　邑宗[illegible]

[illegible]

右方中　左　[illegible]

判　左　[illegible]

[illegible]

西行御裳濯歌合

[illegible]

判　左　[illegible]

てきこの仕このまゝにて又
人〻ともに相見へ申候
候ハ、この事い人〻あつてこふ
あるべき也然とも一分ニこゝを
ハいてすゝ也ゝ色〻

一あるべ
京都内府ハ奇
ゆゑ[illegible]校をあるべ
京〻多賀を七文字ハ綸〻ハ
けの風ハ[illegible]実ニ〻字を朝

あ字まゝハ初ゆ〻字ハ綸〻てあの
字書かゝ也ハ七字ハ字ハ綸ハきて
ゝハあの字ハ[illegible]仕事風
不甚心品ハ

一うてハ
西行御衣躍会た
[illegible]
判ハ奇すゝ
仕ゝ也ゝ
ひ甚也さハ

[illegible]

衣笠内府　[illegible]

京[illegible]山和尚[illegible]地[illegible]孫事[illegible]

[illegible]

頂徳院[illegible]百首

[illegible]

[illegible]錦繍[illegible]

[illegible]

[illegible]

院五十首　月照清水　宗家

[illegible]月神[illegible]

権大納言家三十首　同

張伯

[illegible]

大納言典侍早世時　為家

[illegible]

内裏秋十五首会　宗家

[illegible]

衣笠内前　[illegible]

京[illegible]　[illegible]

[illegible]

順徳院御百首

[illegible]

[illegible]　桜園錦繍

[illegible]

足[illegible]

院御十首　月照流水　宗家

[illegible]

権大納言家三十首

隠岐

きよせてとゝまらぬ[illegible]

大納言典侍早世時　為家

[illegible]

内裏秋十五首会　宗家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

民ゝ賞法百首詠中[illegible]

内ゝ彼[illegible]会ゝ時[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]夜

[illegible]百首歌会　[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八雲御抄よりあらはしいづる百葉

[illegible]

一なるべし

[illegible]百番歌合　九月　弘忠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六百番歌合　九月　有家朝臣

[illegible]

判　兩方ともに[illegible]

以[illegible]　九中内宮詩[illegible]

[illegible]

百葉集十六　前大納言為氏

むらちあまり花のかをりにそ[illegible]

一こゑ[illegible]

千載百番　右　寂蓮

あらき[illegible]

京へ判元いたしまつる事外
花を霧中庵わつらはせつるや
ふこるてい
こゝ結ん
一かつらす
順徳院御百首
秋風やをのへにしるしなんとすきうゑまの谷
文政四年京へ来れ花のうれあつら
京へ又茅舎いらつしの初花見
神春有り

蹟松堂　落家

辛松ゝ十二ゝきれつゝ花うゑ神ゝ春けうう
貞享二年　同
居うのゝ行うゝ白ゝ道のうふさうゝ色うう
六百番歌合　言おう
ぢうこ能ふのあやうゝ格うの毋園とひうゝ宮の紀
一月花と　ゝ能て春ゝ

一ゝ人ゝ
西行御裳濯歌合

[illegible]

[illegible]

行とゝ沙汰ゝくし きくハ海ゝとうあるんと
すゝむるもゝ又ゝゝ はなのわゆゝれ
ゝちてそゝれゝ れるゝハ神くゝ 行ゝゝる
ゝもゝゝ又ゝ トゝゝ ゝゝゝ
月の月ゝゝ ゝゝてゝゝ ゝゝゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝゝ

ゝゝハあるゝちゝゝゝゝん

保雪卿

ゝゝゝゝ

京ゝ判ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝ

行ゝゝゝゝ

一巡のゝと柳

西行法師嚴島へ参

ゝゝゝゝゝゝゝ

こゝいてさもしらでいかりとよ

一ふてとさくのあ

中務宮親王文意三百首より

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

晉帖圖物水黃宋